

キプリングの “The Bull that Thought”

——聖牛アピスとフランス表象——

上 石 実加子

キプリングの“The Bull that Thought”

—聖牛アピスとフランス表象—

上 石 実加子

目次

1. はじめに
2. フランスの英雄フェルディナン・フォッシュ
3. 暗殺者アピス
4. フランス人が語るアピス
5. おわりに

1. はじめに

キプリングの短編「考えた牛」“The Bull that Thought”は、そのタイトル通り、考える力を持った一頭の牛の生涯について書かれた物語である。フランスのカマルグという農村で飼育されたアピスという名の牛は、生まれながらにして知能が高く、思考力を備えており、相手が動物であれ人間であれ、自分がつねに相手の優位に立つことを鋭く意識している牛として描かれている。そのため、ともすると小さな農場の家畜たちを自らの敵と認識しては、次々に殺しかねないこの雄牛のきわめて凶暴な一面に、牧夫をはじめとする農場主たちが大変に手を焼き、この雄牛は、スペインの田舎町にある闘牛場に送られることになる。ここでアピスは闘牛の牛として、闘牛士と共にあざやかなパフォーマンスを繰り広げて観衆を興奮の渦に巻き込み、闘牛士に華を持たせて物語は終わっている。

かつて闘牛に魅せられたヘミングウェイが、入念な取材に基づいて闘牛にまつわる作品を執筆していったように、キプリングもまた、

この作品の執筆に際して、スペインやフランスに出かけては、闘牛場によく足を運んでいたといわれる¹。本場スペインにおいて闘牛は、19世紀になると細かな規則や儀式に則って制度化されたものとなり、普通、演技は主に3部に分かれ、ピカドールの槍入れの場、銛打ち手バンデリリエロの演技、そして最後にマタドールによるムレタでの演技と剣を使った牛の刺殺と続く(有本, 15)。

キプリングのこの物語における闘牛のテーマについて分析したジャン・マレは、コリーダ(闘牛)の本質がよく理解されているとしながらも、トレオ(闘牛術)における基本的法則が看過されていることを理由に、作品に対する違和感を露わにした(Maler, 9)。それは、アリーナに入る牛は「考えた牛」であってはならないことである。英語では闘牛を“bullfight”というが、スペイン語でいう闘牛「コリーダ」は、牛と「闘う」のではなく、「牛を走らせること」を意味する。アリーナの牛に求められているのは、躊躇なしに動くものすべてに突進していくことであり、突進の前に間を置いてケープを見たりするような牛は「センチド(分別, 判断力)」を持った牛として危険視される(マーヴィン, 140)。トレオの基礎は<人が牛をだます点にある>のにもかかわらず、牛の方でも人を欺こうとすればトレオは混乱してしまう。つまり、キプリングは、こうしたトレオの基本的法則にあえて背くような「考えた牛」であるアピス

を英雄として主人公に据えていることになる²。

本論は、このアピスという雄牛の象徴性について考察するものである。かつてボーデルセンは、アピスが「芸術とフランス精神」の象徴となっている (Bodelsen, 64) と述べたことがある。芸術とフランス精神——前者に関して言うなら、物語中にアピスを芸術家 (Artist) に喩える表現が複数散見されることから、この作品にはキプリングの芸術論が描かれているのだとする批評 (Gilbert, 171)、アピスの一連の残虐ともいえるパフォーマンスの数々に、キプリングの “brutal realism” への回帰 (Birkenhead, 333) をみるもの、最高の芸術家たるアピスが「キプリング自身のクリエイティヴ・スピリットのモデル」 (Lycett, 525) となっていることを指摘するものまで、「キプリングのストーリー・テリングという芸術の熟達ぶりを呈示している」 (Schaub, 309) とする批評は実に多くある。しかし、後者については、この物語がキプリングのフランス語の知識とフランス的な考え方に対する鋭い観察眼に彩られた (Macmum, 287) 作品であるとして、キプリング自身が生涯を通じて親仏家であった (Carrington, 414) ことに関連づけられて論じられているのみである。

1924年に執筆されたこの物語「考えた牛」において、「フランス」はどのように表象されているのか。以下に、フランス生まれのアピスの描かれ方をみていくことで、アピスの飼い主であるフランス人と「私」という英国人の登場人物の関係性からキプリングの描いた「フランス」について再考を試みたい。

2. フランスの英雄フェルディナン・フォッシュ

並外れた鋭い思考力を備えて殺意ある陰謀を巧妙に企てているかのような雄牛アピス。この牛は、「エジプトの聖牛にちなんで名づ

けられている」 (Page, 75)。古代エジプトのメンフィスで崇拝された聖牛アピスは、やがてエジプト全土でもっとも偉大な神の一つになった。エジプト人にとって最高神の創造主をプタハというが、そのプタハが、アピスと呼ばれる雄牛の身体に宿って地上に出現すると考えられていた (アッテンボロー, 81)。聖牛として、また神の化身としての記号性を持つアピスは、キプリングの「考えた牛」において以下のように表現されている。

A picador was sent at him—necessarily from the front, which alone was open. Apis charged—he who, till then, you realize, had not used the horn! The horse went over backwards, the man half beneath him. Apis halted, hooked him under the heart, and threw him to the barrier. We heard his head crack, but he was dead before he hit the wood. There was no demonstration from the audience. They, also, had begun to realize this Foch among bulls! The arena occupied itself again with the dead. (Kipling, 768) (下線部引用者)

いよいよアピスが闘牛場でデビューを果たし、ピカドールに相対したときの場面であるが、ピカドールを含むアリーナ内にいる闘牛士たちが、アピスを「雄牛たちの中のこのフォッシュ！」だということに気づき始めたとなっている。この「フォッシュ」とは、フランスの軍人フェルディナン・フォッシュのことであり、第一次世界大戦の連合軍側の勝利に最も貢献したとされる将軍である。1870年の普法戦争に19歳で従軍、74年に砲兵隊に登録し、85年より陸軍大学校で学び、その後、この陸軍大学校の軍事史講師をつとめ、校長となっている。第一次世界大戦中は1914年の

マルヌの会戦、アルトワの戦いなどで活躍し、1917年にはフランス軍総司令官となり、その翌年に連合軍の総司令官に就任。この年ドイツ軍の進撃の前に壊滅しそうになった連合軍を、アメリカの大規模な救援部隊の到着まで戦線をよく保持し、勝利に導いた。同年8月、元帥の称号を受け、第一次世界大戦におけるフランス最高の将軍と称される人物である。

フォッシュについて著した石丸優三によると、陸軍大学教官として、フォッシュは戦術や戦略一般について講義をしていた資料をもとに戦術論についての著作を発表している。その主張として、「戦争は一種の技術である」として、戦争はむしろ技術を学ぶのであって、明晰な頭脳と深遠な考慮を案出し、その技術の精妙を期するべしと説きつつも、従来のフランス軍事教育が、兵隊の数や時間や場所といった数や物質的要素に基礎を置いて行動することのみに専念していたことが、例えば普仏戦争での敗戦につながったと振り返る。戦争の主体は人間なのであるから、人間が主体となって戦うことを見直し、戦闘の勝敗は、物質力の如何ではなく、精神力および心理力の如何によって決定するのだとして、戦闘は、敵の戦闘的精神を挫折させることが最終目的とする、人的要素すなわち精神的方向に重きを置くべきとフォッシュは主張した。

フォッシュは敵がその鋒先を緩めているか、若しくは側面に余裕でもあることを認めるや否や、たちまちにこれ反撃を加えることを怠らなかった。これがフォッシュの当時の作戦の根本方針であった(石丸, 351)。

こうしたフォッシュの攻撃のスタイルは「側面攻撃」と呼ばれている。真正面からの攻撃を仕掛けるのではなく、敵の油断をついて側面から攻撃することであるが、1914年の

マルヌの戦いでは、本来なら退却以外ありえないような戦況にあったにもかかわらず、フォッシュ率いる第42師団がこの側面攻撃によりドイツ軍を撃退し、長期化した戦いを制した上でフランス・イギリス両軍を勝利に導き、元帥の称号を授与されている。

But, some time before he went to Arles—yes, I think I have it correctly—Christophe, who had been out on the Crau, informed me that Apis had assassinated a young bull who had given signs of developing into a rival. That happens, of course, and our herdsmen should prevent it. But Apis had killed in his own style—at dusk, from the ambush of a wind-break—by an oblique charge from behind which knocked the other over. He had then disembowelled him. (Kipling, 762-63) (下線部引用者)

この引用は、アピスがまだアルルに行く前の様子の描写であるが、「アピスは独自のスタイルでライバルの牛たちを殺す」とあり、この独自の攻撃スタイルは、待ち伏せをして、背後から「斜め方向の攻撃」を仕掛けてくることだと説明されている。牧夫クリストフの言葉を借りるなら、“He can side-kick as he jumps.” (761)とあり、アピスが飛び上がりながら側面攻撃を行っているを読むことができる。まさに、フォッシュが敵の油断をついて側面攻撃をする作戦が、アピスの殺しのスタイルと一致し、アピスが「雄牛のなかのフォッシュ」と形容される理由の一端がみえてくる。

兵士の士気を高め、敵を壊滅させる闘志をうえつけて、つねに攻撃せよと獣のように叫び続けたフォッシュは、英雄視されつつも残酷な一面を覗かせるが、これは雄牛アピスに

もまた、闇討ちをかけるような攻撃の末、相手のはらわたを引き裂いて殺すという残酷さがあることと奇妙な一致をみている。

キプリングは、フェルディナン・フォッシュとは実際に面識があり、こうしたフォッシュの戦略に賛同していたといわれている。この当時のフランスの英雄的存在が、フランス育ちのアピスの姿に重ねられているのである。

3. 暗殺者アピス

アピスが自分のライバルに成長してくるきざしのある若い雄牛を殺していたことをクリストフから聞くというヴォアロンの語りにおいて、アピスは若い雄牛を「暗殺した」(assassinated) という表現が用いられている。前節において参照したように、アピスが自分自身のやり方で殺すのだという説明は、夕暮れ時に防風林の待ち伏せ場所から襲撃するというもので、まさに、「暗殺」と呼ぶに相応しい、闇討ちをかけるかのような方法である。

フランス人であるヴォアロンが英語で「暗殺した」というとき、この表現はどのように理解されるべきなのか。つまり英語の“assassinate”は、フランス語の“assassinair”を語源としている語であるが、フランス語の“assassinair”には、「暗殺する」という意味はあるものの、家畜類を殺す「屠殺する」という意味、あるいは人などを「殺す」という意味も同時に持ち合わせる単語である。フランス人のヴォアロンが英語で話す語りに、“assassinate”を使っていることは、フランス語的な語感からすると、単に「殺す」を意味するものとしてとらえることもできるので、何ら不自然ではないかもしれない。

しかし英語ので“assassinate”という場合、基本的にこの単語は、政治的、宗教的な理由から、ある重要人物を「暗殺する」という意味を持つ単語である。少なくとも英語読者にとって、この単語は、「殺す」という意味以

上のイメージを与えるものであるといえるのではないか。クリストフは結局、アピスが二歳半のときにスペイン人に売るのが、その説明も次のようにアピスは「暗殺者」という語が与えられているのがわかる。

“[...] Yes, Christophe sold Apis, who was then two and a half years old, and to Christophe’s knowledge thrice at least an assassin.(Kipling, 765)(下線部引用者)

この「暗殺」というキーワードと、前節で触れたフェルディナン・フォッシュの活躍した第一次世界大戦とを結ぶ「アピス」の表象として思い出す必要があるのは、アピスとは、第一次世界大戦の発端となったサラエボ事件に大きく関係するセルビア人男性のニックネームでもあったことである。ドラゲーティン・ディミトリエヴィチという本名で、アピスという呼び名で知られたこの男は、第一次世界大戦勃発の発端となったサラエボの暗殺事件に大きく関与した黒幕として歴史に名を残している人物である。

第一次世界大戦の発端は、周知のとおり、1914年6月28日に、オーストリア皇太子フランツ・フェルディナンド大公が、自領ボスニア＝ヘルツェゴビナ共和国の首都サラエボにおいて妻と共に暗殺されたことに端を発し、オーストリア＝ハンガリー政府がセルビア政府へ宣戦布告を行なうことから始まるものだが、このサラエボ事件の実行犯はガブリロ・プリンチプというボスニア在住のセルビア人青年であり、14名からなる暗殺グループの一員であった。このグループは、ボスニア・ヘルツェゴビナなどセルビア人の居住地の統合を目指す大セルビア主義を標榜する「黒手組」(ブラック・ハンド)という秘密のセルビア革命結社によって援助を受けていた事が分かっている。アピスとはまさに、この黒手組の指

導的立場にたっていた人物であり、フェルディナンド大公殺害の陰謀を組織し、命令を下す手助けをしたとされている。

彼が公言していた目的とは、当時のバルカン戦争によって疲弊していたセルビアに対するオーストリアの攻撃を回避させることであったが、それとは裏腹に、大公の死が第一次世界大戦を誘発することとなった。

当時セルビアは、アレクサンダル・オブレノヴィチ国王による専制的な統治が行なわれていた。国内においては抑圧的な政治を、しかし外交においては消極的な姿勢であったこの王は、アピスのような民族主義的愛国者のセルビア人には不人気であった。このような、反愛国主義的で無価値な政治を終わらせるためには、王を追放するしかないとして、アピスと若い将校の同志たちが広範囲にわたる陰謀を計画、1903年5月29日、アピス大尉はこの陰謀者たちを勝利に導いたが、セルビア王国統治者のこのセンセーショナルな殺害は、ヨーロッパを震撼させたといわれている。

「アピス」とはギリシア語で「蜂」、アラビア語で「雄牛」のことである。大柄で行動力にあふれていたため、友人たちから「アピス」と呼ばれるようになったと説明されている。このアピスは、1906年から1914年まで、セルビアの基本的な決定や任命すべてを牛耳る「黒幕」であったとの見解も存在する。アピスを擁護する者たちは、かれが第一次世界大戦におけるセルビアの勝利に貢献した愛国的で忠実な将校であったと主張し、一方でアピスの敵対者たちは、セルビアに軍事政権を樹立しようと企てた反逆者でかつ暗殺者であると主張している（マッケンジー、22）。

アピスは、人並みはずれて聡明で知識が豊富であったが、敵が多く、しばしば怒りや憎悪をむきだしにしたり、無慈悲に人を犠牲にする冷淡な一面があったと報告されている。

キプリングの作品に登場する牛アピスが、牛としてはきわめて賢い、考える力を持った

牛であることと、闘牛場において馬や人間をきわめて残虐なパフォーマンスによって殺していることを考えると、「アピス」の記号は、第一次世界大戦を引き起こした「黒幕」の影を帯びているとも考えられるのである。

4. フランス人が語るアピス

フランスで飼育されたアピスの一生は、この雄牛を育てたフランス人牧夫クリストフの視点を通して、フランス人ヴォアロンが英国人である「私」に語る枠内物語となっている。フランス人から英国人へと伝えられるこの枠の存在を意識することにより、以下に「フランス」がどのように描かれているのかについて注目していきたい。

He said my chauffeur had told him that I contemplated an experiment. He was interested in cars—had admired mine—would, in short, be greatly indebted to me if I permitted him to assist as an observer. One could not well refuse; and, knowing my Mr Leggatt, it occurred to me there might also be a bet in the background. (Kipling, 757-58)

「私」は、車のスピード実験をしようとしていることを、運転手のレガットがすでにヴォアロンに話していたことを知る。ヴォアロンに「立会人として」実験をアシストしてもらうことを許可すれば、「私」がヴォアロンに恩を売ることができると考えているかのようなこの引用において、「私」は、「アシスト」をフランス語的に解釈しているといえる。ダニエル・カーリンも指摘するように、ここで“assist as an observer”となっているのは、“assist”が英語的にいう「援助する」という意味ではなく、フランス語の“assister”

が意味するように「第三者として立ち会う」というフランス語的な趣を持って伝えられている (Karlin, 634) からである。フランス語の知識を備えている「私」のあり方は、一見するとフランスに理解を示しているかのようでもあるが、キプリングは、こうしたテクニクを、英国の潜在的な敵国であった頃のフランスを風刺するのに用いた (Karlin, 634) と指摘されていることも考えると、英国人である「私」がフランス人ヴォアロンに対して疑念ともいえる感情を抱いていると解釈することができるだろう。こうした感情は、そのまま物語中においてアピスを語るフランス人ヴォアロンに伝わり、それが彼の「イギリス」への微妙な感情の表出につながっているといえる。

以下は、アピスの血統について説明された箇所である。

I revert to Voiron Frères—wines, chemical manures, et cetera. And next year, through some chicane which I have not the leisure to unravel, and also, thanks to our patriarchal system of paying our older men out of the increase of the herds, old Christophe possesses himself of Apis. Oh, yes, he proves it through descent from a certain cow that my father had given his father before the Republic. Beware, Monsieur, of the memory of the illiterate man! An ancestor of Christophe had been a soldier under our Soult against your Beresford, near Bayonne. (Kipling, 764)

アピスは、ヴォアロンの父親からクリストフの父親に、譲り渡された牛の血統を受け継ぐものであり、それが「共和制の前」“before the Republic”であるとなっている。この

「共和制」“the Republic”とは「1871年に成立した第三共和制を指している」(Karlin, 635)のものであり、よって「共和制の前」は、この第三共和制の前、つまり、ナポレオン3世による統治時代の第二帝政1852年から1870年にかけての時期を指していることがわかる。ナポレオン3世によるフランス第二帝政は、ナポレオン3世が強力な国家体制を基礎に産業革命を強力に推し進め、フランスに経済的繁栄をもたらした時期である。つまりアピスがこの時期に飼育された牛の血統を受け継いでいるという説明は、フランスが繁栄を極めた頃のフランス精神を受け継いでいる、そうヴォアロンが主張していることになろう。

引用の最後の「クリストフの先祖は、バイヨンヌの近くで、あなたの国のベレスフォードと戦った我々の国のスルトの指揮下にいた兵士だった」というヴォアロンの言葉は、当然、英国の軍人ウィリアム・ベレスフォードが、スルト率いるフランス軍を破った1811年のアルプエラの戦いを念頭に置いていることはほぼ間違いない。

1808年から1814年、スペイン独立戦争として知られるスペイン・ポルトガルによるナポレオン1世支配に対する民族主義的反抗、独立戦争は、スペイン・ポルトガル軍をイギリスが支援する形でフランス軍と戦った大戦争であり、引用最後にある地名バイヨンヌは、1814年に、先の戦争の最後の戦闘が行なわれた場所であり、ナポレオン没落の一因となったこの戦争の象徴的な記号である。さらに1815年にはワーテルローの戦いで、ナポレオン1世率いるフランス軍はウェリントン公指揮下にあったイギリス軍に大敗した。つまり、ヴォアロンの語りは、イギリスとフランスの間にある緊張関係が絶えず意識されたものになっていることが分かるのである。ヴォアロンが語るフランスの英雄アピスの話は、フランスが英国に敗れた戦争の歴史と共に語られる。ヴォアロンと打ち解けているようで

警戒心を見せる「私」のあり方もまた、同じように両国の間に存在する緊張関係を喚起させているのである。

5. おわりに

第一次世界大戦においてフランスが戦ってきた凄まじい戦闘を表現するために、アピスはフランスの英雄フェルディナン・フォッシュの崇高な表象性を伴って、フランス精神そのものの賛美の象徴となっている。アピスのことを「雄牛たちの中のフォッシュ」と呼んだフランス人ヴォアロンは、アピスの牧夫であったクリストフと共に、最後に母なるフランスを祝して乾杯をする。しかしながら、同じく第一次世界大戦時の暗殺者といわれた黒手組のアピスの表象も手伝って、雄牛アピスの一連の残虐な側面攻撃は、今度は逆にフランスの英雄フォッシュの冷酷な戦略ぶりを逆照射することになり、フランス賛美はいくぶん皮肉的な色合いを帯びて読者の前に呈示されている。

また別の見方をするなら、アピスはクリストフが聖水を注いでも全く効き目のない暴れ牛であった。その意味で、エジプトのメンフィスで崇拜された聖牛という記号性を持つこの牛は、スペインとフランスというカトリック国に投げ込まれた異端の象徴となり、フランスという素晴らしい地においてこそ大富豪としての魅力を勝ち得たヴォアロン (Crook, 185) の成功物語に疑問を投げかけるテーマが示唆されているといえないだろうか。

1878年、父親と共にパリの万国博覧会に行ったことを契機に、フランスに憧れを抱きはじめたキプリングにとって、フランスは第二の故郷であった (Wilson, 334) といわれるほど、キプリングはフランスをこよなく愛した作家として知られる。特に1904年の英仏協商において、イギリスとフランスが互いに協力関係を築いたとき、キプリングはこのときか

ら生涯、英仏協商に対する忠誠心を誓うことになった (Carrington, 415)。

だが、キプリングが『ジャングル・ブック』を発表した3年後の1898年から1899年、エジプトの領有権をめぐる、イギリスとフランスの間の関係に不和を生み出すファショダ事件が起こった直後、キプリングは、英国海軍の船に潜入しフランス人スパイの行動を嘲笑する“Bonds of Discipline”という短編を発表し、フランス人スパイの登場人物を嘲るような作品を書いている。もちろん、フランスでの人気が一時急落したことはいうまでもない。このことは、ジャーナリズムの世界に身を置いてきたキプリングが、歴史的にはつねに戦争を繰り返してきたイギリスとフランスの互いの敵国意識を敏感に感じ取っていたことの証左となっている。「考えた牛」アピスの複雑な表象性と、この牛について語るフランス人の語り手とイギリス人の聞き手の間に存在する緊張関係は、キプリングのフランスに対する複雑な立場をそのまま表象することになっているといえるのである。

(本論は2008年9月に日本英語文化学会第11回全国大会において口頭発表したものに加筆修正を施したものである。)

註

- 1 キプリング夫妻はフランスやスペインを訪問中にいくつかの闘牛場に足を運んでいる。友人で外科医のサー・ジョン・ブランド・サットン (Sir John Bland Sutton) が闘牛の熱的なファンであり、キプリングに闘牛にまつわる様々な詳細について教えたのではないかとされている (Lycett, 509)。また、キプリングの娘エルジーの夫であるジョージ・バンブリッジ (George Bambridge) が、キプリングをセビリアの闘牛場に案内している。
- 2 キプリングはアピスについての話のヒントを、あるアンダルシア人に引き取られた Lechuzo という牛から得たのではないかとされている。この牛は、トレオのしきりに反して、

闘牛場で殺されなかった牛だとされている
(Ricketts, 143)。

—第一次世界大戦をおこした男』柴宜弘, 南
塚信吾, 越村勲, 馬場真砂子訳, 平凡社, 1992年

引用文献

- Birkenhead, Lord. *Rudyard Kipling*. London: Weidenfeld and Nicolson, 1978.
- Bodelsen, B.C. *Aspects of Kipling's Art*. Manchester: Manchester University Press, 1964.
- Carrington, Charles. *Rudyard Kipling: His Life and Work*. London: Macmillan, 1955.
- Gilbert, Elliot L. *The Good Kipling: Studies in the Short Story*. Manchester: Manchester University Press, 1972.
- Karlin, Daniel. Ed. *Oxford Authors: Rudyard Kipling*. Oxford: Oxford University Press, 1999.
- Kipling, Rudyard. "The Bull that Thought," Tobert Gottlieb, ed. *Rudyard Kipling: Collected Stories*. London: Everyman's Library, 1994, 757-73.
- Lycett, Andrew. *Rudyard Kipling*. London: Weidenfeld & Nicolson, 1999.
- Macmunn, Sir George. *Rudyard Kipling: Craftsman*. London: Robert Hale Ltd., 1938.
- Maler, Jean. Adapted by Max Rives. "Comments on 'The Bull that Thought'," *The Kipling Journal*. The Kipling Society. Vol. 77. no. 306 (June, 2003), 9-11.
- Page, Norman. *A Kipling Companion*. London: Macmillan Press, 1984.
- Ricketts, Harry. Ed. *Kipling's Lost World*. Cornwall: Tabb House, 1989.
- Schaub, Danielle. "Kipling's Craftsmanship in 'The Bull that Thought'," *Studies in Short Fiction*. 22: 3 (Summer, 1985), 309-16.
- Wilson, Angus. *The Strange Ride of Rudyard Kipling: His Life and Works*. London: Secker & Warburg, 1978.
- アッテンボロー, デイヴィッド『図説 地中海物語——楽園の誕生』橋爪若子訳, 東洋書林, 1998年
- 有本紀明『闘牛——スペイン生の芸術』講談社選書メチエ83, 1996年
- 石丸優三『元帥フォッシュ』春秋社, 1930年
- マーヴィン, ギャラリー『闘牛——スペイン文化の華』村上孝之訳, 平凡社, 1990年
- マッケンジー, デイヴィッド『暗殺者アピス—

[Abstract]

Kipling’s “The Bull that Thought” : The Sacred Bull Apis as a Representation of France

Mikako AGEISHI

Kipling’s short story “The Bull that Thought” (1924) is based on his love of France and his experiences of attending bullfights whenever he was in France or Spain. It is an anecdotal account of the life and performance of a bull named Apis, born and bred in France. Because of the remarkable frequency of the words ‘art’ and ‘artist’ in the story, it is also called an allegory on art and artists. Some critics have pointed out that Apis stands for artist and the French spirit. This paper focuses on Apis not as artist but as the French spirit. Although of these two things, the former is clearly intended as the most important meaning of the symbol in the story, this paper discussed the indication of the second symbolic meaning by exploring how Kipling expressed France and by comparing his admiration for France, especially after the Entente Cordiale of 1904, as England and France drew closer together.